

稲の遅植えのメリット、デメリット

2009年、但馬全域を対象に早植え田、遅植え田のコシヒカリを採集し、移植期の差異による収量・品質の変動を調査した。その結果、遅植えは早植えに比べて、玄米整粒率で7%向上するものの、収量は10%程度低いことがわかった。

内容

但馬地域では、登熟期高温によりコシヒカリの1等米比率が大きく低下した2001年産米の品質向上対策として、翌年からは、従来の5月上旬移植（早植え）を5月下旬（遅植え）に遅らせる対策を採用し、1等米比率を80%以上に回復させることができた。その後、現在も本対策は継続しているが、収量面での不満の声も聞かれ、従前の移植期に戻す生産者も増えている。

表1に調査田の生育・収量・品質を示す。早植え田の平均移植日は5月3日、遅植え田では5月18日であった。稈長・穂長は両者に差はほとんどなかったが、穂数は遅植え田で少なく、全重、精玄米重も軽かった。遅植え区では、^{もみ}籾比も小さく、「生育の割に穂が軽い」傾向がうかがえた。一方、整粒率は遅植え田が7%上回った。品質では遅植え田で明らかに良く、未熟米や死米などが少ない（データ省略）ことから、登熟期の高温の影響が小さかったと推察される。

表2に生育期間中の平均気温を示す。出穂予測に

より推定した遅植え田の移植から出穂までの日数は10日短く、当該期間中の平均気温は1.3℃高かったが、登熟期間はほぼ同程度の日数で、当該期間中の平均気温が低かった。2009年はやや低温に経過する期間が長く、白未熟粒が発生する目安となる出穂後20日間の平均気温は、警戒水準の27℃（富山県の設定、2003年）には達することはなかったが、早植え田で24.1℃、遅植え田で23.1℃となり、早植えで1℃高かった。遅植え田では、登熟期間中の気温が低かったことが良質化につながったが、移植から出穂期までの平均気温が高いことから、幼穂分化が早まることによって、穂数が少なく、収量が低くなったと推察される。

普及上の注意事項

晩植に深耕（本誌No.173参照）などの技術を組み合わせることにより低下した収量を補完することができる。

澤田 富雄（北部農業・加工流通部）
（問い合わせ先 電話：079-674-1230）

表1 早植え、遅植えの生育・収量・品質

作期	平均移植日	稈長	穂長	穂数	一穂 籾数	登熟 歩合	千粒 重	全重	精玄 米重*	同左 比率	籾 比	玄米 整粒 率
		cm	cm	/株	/穂	%	g	kg/10a	kg/10a	%		%
早植え	5/3	86	18.4	27	80	76	22.0	1442	601	100	1.23	77.0
遅植え	5/18	87	18.7	23	82	77	22.2	1317	540	90	1.13	84.2

* 精玄米重は50株/坪植を仮定して1株収量より算出、調査数62圃場

表2 早植え、遅植えの出穂期・成熟期と生育期間中の平均気温

作期	出穂期	成熟期	出穂まで		成熟まで		本田期間	
			日数	平均 気温	日数	平均 気温	日数	平均 気温
早植え	8/2	9/10	91	19.4	39	22.7	130	20.4
遅植え	8/7	9/14	81	20.7	38	22.0	119	21.1

注) 出穂期・成熟期は近畿中国農業研究センターWeb出穂予測に基づき算出した